
Last Message

てるタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Message

【Nコード】

N8004E

【作者名】

てるタン

【あらすじ】

オレ（てる）には、友達以上恋人未満だった美子がいた。そんな中、親友のわっちが美子に告白されたというじゃないか。そして、オレは同クラスの茜に好意を寄せ始めた…。この複雑な関係は果たしてどうなるのか…！？

1、奇跡のボウリング

僕とわっちは、古くからの友人だった。だけど、本当は、出会っちゃいけなかったんだ……。

雲ひとつない晴天に見舞われたある日の土曜日、近所のスリーエフの前で僕とわっちは友人のである星とガッキーを待った。外は7月と夏の真っ只中で、猛烈に暑い。

「もう、我慢できない！中入ろうぜ！」

僕がそう言って、スリーエフの中に入るとまるで天国のように生き返った。そして、キンキンに冷えたスイカバーを買って外に出た。もっと中にいたかったけれど、ちょうど星とガッキーが来たからだ。「ごめーん。待ったー？」

暑さにやられてるせいか、妙に星の言葉に覇気がない。

「大丈夫かー。もっとやせろよー。」

と、おちよくったようにガッキーが言う。確かに星は体系がぽっちゃりしていて、ジーパンから腹の肉が出ている。

そんなことは良しとして、僕たちは、今日近くのボウリング場に行くのだ。一ヶ月ぶりのボウリングなので、とてもウキウキしている。

「みんなそろったし、行こうぜ！」

そう言って僕は暑さにすっかりやられてるみんなをまとめあげた。みんなスリーエフに入りたかったみたいだが、ボウリング場はすぐ人で溢れかえってしまうので早く行かないと場所がなくなると、みんなを急かした。

みんなぞろぞろと自転車に乗った。何かを焼いている鉄板のように、サドルが熱い。

僕は、それにこらえ走った。目の前には、横断歩道があるのだが車は誰も止まってくれず、5分も待つはめになった。

やっと、通り抜けて気持ちのいいサイクリングができるようになった。

た。

ボウリング場に着いた。建物の3階にあるので、階段を昇るのが正直しんどかった。中に入るとたいして混み合っていないく、まあ十分だった。

場所を取ると、真っ先に僕がそこへ行った。よっぽどボウリングがやりたかったのだ。イスに座って休憩して、始めようとした。

最初は、僕。勢いよく投げようとしたその瞬間！

「ちょっと待って！ただボウリングやってもスリルがないから・・・、そうだ！ビリだった人は、自分の秘密をばらすってのはどう？」

星が大きな声で言った。僕は、あまりにも急だったので転んでしまった。

僕合わせてみんな賛成と同意見だったので、あっさりそうになってしまった。でも、僕は安心していた。だって、わっちがいるじゃないか。

わっちは前、僕とボウリングに行った時にスコア30という奇跡的な数字を叩きだしたのだ。だから、絶対わっちがビリだと思っていた・・・。

結果は・・・、うん。予想通りわっちだった。僕137、星97、ガッキー86、そして、わっちが・・・、21。

え・・・21！まさか・・・そんな数字があるなんて・・・。

なんていう風にみんなの顔は、驚きと不思議が交錯していた。

なぜ、わっちがそんなスコアを叩きだしたかって？わっちは、10回連続でガーターを出したのだ。それでも十分ありえないことなのだが、さらに凄いことに隣のレーンにボールが飛ぶという奇跡が起った。

まさか、そんなことが起こるなんて思わなかった・・・。隣の人達は、当たり前だけど笑っていた。恥ずかしい・・・。

そんなわけで、わっちが秘密をばらすことになった。わっちは俯いたままもじもじしている。

「どうした！早く話してよー！」

星とガツキーが急かす。

そして、とうとう重かったわっちの口が開いた・・・。

「オレ・・・。」

みんなはゴクリと唾を飲み込む。果たしてわっちの秘密ってなんなんだ？

2、友人の秘密

「おれ・・・、告白されたんだ・・・。」

なんだそんなことか・・・、ってええー!! わっちが告白された・・・、今オレは夢でもみてるんじゃないかってそう思った。しかし、わっちは真剣な表情で続けた。

「おれ・・・、どうすればいいんだろう？ 女子と接することなんて一度もなかったし・・・。」

みんなもわっちがどうすればいいのかわからないと思うのは、当然だと思っていたようだ。本当にわっちは女性経験がなかったからだ。驚きのあまり、固まってわっちの方を見る。しばらくの沈黙の後、稲垣がつつくように言った。

「おい。誰にコクられたんだよ!」

その言葉が僕たちの人生を左右することも知らずに・・・。

わっちは、ためらいながら恥ずかしそうに言った。

「えっと・・・。坂口美子さんっていう子・・・。」

その言葉を聞いた時、僕はめまいがして・・・その場で倒れてしまった・・・。

「う、うーん。こ、ここは・・・。」

僕はやっと目が覚めた。白くてとても高い天井が僕の目に映った。

「やっと目、覚めたか! ここは病院だぞ。」

慌てて横を見る。そこには心配そうに見つめるわっちの姿があった。

「そうか、ここは病院か・・・。」

確か、ボウリング場で倒れたのは覚えていたのだが、なぜ倒れたのかは自分でさえ覚えていない。

「お前、なんでオレが秘密ばらしてる時に倒れんだよ! バッドタイミングだぜ!」

その言葉にふと我に帰った。そうか思い出した・・・。あの時わっち

は誰かに告白されたと言っていた。でも・・・そのコクった人の名前を聞くと・・・とても胸が痛くなった・・・。

「坂口美子・・・。」

そう、僕が7年間もの間、片思いし続けた運命の女の子だ。彼女は、とても明るくまじめで、誰からも好かれるような素晴らしい女の子だった。よく遊んで、帰る時はいつも一緒に・・・どこにても一緒に、もう恋人のような関係になっていた。

それなのに、どうして・・・どうして彼女は僕を捨てたんだ・・・。あんなに恋人の関係を築いていたのに・・・。

「どうしたの。顔色が悪いぞ。」

わっちが心配そうに言っただけだが、僕には聞こえなかった。

どうして・・・、なんで僕じゃないんだ。美子のことを思うたび、胸に激痛が走る。なんで・・・。

そうだ、わっち！コイツがオレの彼女をとったんだ。なんでよりによってオレの親友なんだ。オレはこいつのことを恨んでしまいたいそう

だ。

そして、オレは聞いてみた。

「なんでだよ！なんで美子がお前にコクったんだよ！」

わっちは、なにが起こったかわからないように目を丸くして答えた。
「し、知らないよ！だって美子さんが僕に付き合って下さいって急に言ってきたんだもん。」

オレはその言葉を聞き終える前に言った。

「じゃあ、お前は美子と付き合う気なのかよ！」

頭が爆発しそうなのを抑えて言うわっちも堪忍袋の緒が切れたようにこう答えた。

「だったらなんだっていうの！別にそんな自分の勝手じゃん！なんでいちいちてるにそんなこと言われなきゃいけないんだよ！」

わっちはそう言うのと、泣きながら病室を走って去ってしまった。

そうか、わっち。ごめんよ・・・。言い過ぎた・・・。オレはわっちに美子が好きっていうことを打ち明けた時のことを思い出した。でも

わっちは、誰にもばらさずに黙っててくれた。しかも、オレを応援してくれた。

「ガンバレ！」
ってね。

多分、今回もオレのことを気遣って断ってくれるだろう……。そう思ってた……。

しかし……オレが思ってるほどそんなに甘くはなかった……。

3、これって恋!?

翌日、何とか体調を整えて学校へ行くことができそうだった。

しかし、まだちょっと熱があり、思うように体を動かすことができない…。でも、頑張って支度をし来るはずはないだろう、わっちのことを待っていた…。

：しかし、予想通りわっちは僕の家に来なかった。仕方ないだろう。昨日あんなにわっちを責めてしまったんだから…。

でも、僕の心にはもう一つ別の不安があった。美子のことである。

「わっちは美子の告白受け入れたのかなぁー。」

と、不安に心が支配されている中、一人ぼっちで学校に向かった。普段わっちと歩いているととても早く学校に着いてしまうのだが、今日はとても長く感じる。なぜだろう…。やっぱり寂しいのかなぁー。

「よし! 今日わっちに謝ろう! そして、美子のことはオレが彼女の事を愛してるってきっぱり諦めてもらおう!」

そう一人で呟きながら、後ろから突然聞き慣れた声がした。

「待って! 今の話もうちょっと考えて!」

驚いて後ろを見ると、急いでこっちに向かってくる人がいた。近くで見ると、同じクラスの木下茜だということが分かった。

茜は、中1から同じクラスでよく知っている。

彼女は、あまり目立たない方で、静かで可愛い女子だ。背は、女子のわりに167と高く、スタイルはモデル並にすごい。男子からもちろんモテて、去年の、学年で付き合いたい女子ランキングでNO.3に入っらしい。

美子とは反対の雰囲気を感じ出している。

そんな茜が僕に何のようかと思っていたところ、茜が目の前に来ていきなりこう言った。

「あたし…てる君のことが好き！」

え!?

聞き間違えたか…オレが口をポカンと開けていると茜がこう言った。

「だから…あたし、てる君のことが好きなのよ！」

今は、はっきりと聞こえた。

なんだろう…体が今まで経験したことのないように…熱くなっている…。

「なんだ…とても熱い。」熱さはどんどん増していく。そして、心臓の辺りがドキドキし始めた…。

「う！心臓がバクバクいつてる。なんだこれは…まさか…恋!???」
まさか…な。オレが美子以外に恋をするなんて…。

「どうしたの!?!?てる君？」

茜の言葉で我に帰った。

「いや…なんでもない。」茜が首を傾げてこっちを見る。

「か…可愛い!!」

「え!?!?」

「いや!なんでもない!」オレの胸がどんどんドキドキしてくる。
はりさけそうなくらい…。

茜は、顔を真っ赤にしてうつ向いている。

可愛い……。いつまでも見ていたい……。そんな思いがした。
しかし、オレには美子がいる……。どうしよう……。二股になってしまう……。

4、僅かな時間

キンコン……。

遠くから、学校の登校時間の5分前を告げるチャイムが鳴った。

「どうしよう。もう間に合わないよ。」

茜が心配そうに学校の方を見つめながら言う。

「よ、横顔も可愛い〜！」って心の中で言っていたら、茜がこっちを見て言った。

「てる君どうしよう〜。」オレは慌てて視線を反らした。茜の目を直接見ることが出来なくなっている。

「てる君？顔真っ赤だよ！大丈夫！？」

「え！？大丈夫だよ！」

幸い、オレが茜を見て顔を赤らめていることは気付かれなかった。沈黙の時間が流れる。オレは、この雰囲気断ち切るべく、茜の手を掴んで走り出した。

「て、てる君！？」

「急ぐんだろ？だったら手、離すなよ！」

何をしているんだろう、オレは……。大胆すぎるだろう……。茜が顔真っ赤にしてるじゃないか！

でも、オレと茜はお互いに目を合わせ、笑顔になった。

「てる君？あの返事……」

茜が言い切る前にオレは答えた。

「あー！その返事はまた今度な！今はとにかく走るぞ！」
茜は、静かにうなづいた。

「キンコン……！！」

しまった！遅刻だ！オレと茜はお互いに顔を見合って笑った。チャイムが遠い山の方に悲しく消えていくようだった……。

オレ達は、学校の方を見た。吸い込まれるように生徒達が学校に入

っていく。

オレ達も急げばギリギリ間に合ったのかもしれないが、オレは止めた。

茜と2人でいる時間がもっと欲しかったからだ。でも、茜に直接そんなことを言ったらバカ！って言われそうだったからやめといた。

「行こうか？」

「うん。。」

オレが茜に聞くと、なんか寂しそうに悲しく答えた。

「どした？」

「だって…てる君あたしの手無理矢理掴むんだもん…。恥ずかしいよ…。」

「なっ！」

茜の言葉にオレが余計に恥ずかしくなった。最初からやるのが大胆すぎたか。落ち込んでいるオレに茜が言った。

「でも…嬉しかったよ。男の人にあんなに強く手、握られるの初めてだから…。」

その言葉に余計恥ずかしくなった。自分のした事が大胆だってことが余計分かったからだ。

「そろそろ行こうか！」

「うん！」

オレ達は付き合っているのではないが、その時は恋人みたいな気分がしてたまらなかった。

「オレって罪なヤツだ。美子がいるのに…。」

そういえば、わっちは美子の告白を断ったのかなあ。不安な気持ちを抱いたまま、校門に着いた…。

「コラ～！！お前達～！！仲良く手なんか繋ぎやがって！遅刻だぞ！」

「ひえ～！すいません！」生徒指導の森田が校門の前で竹刀を持って立っていた。いつも、遅刻の生徒は竹刀でぶっ叩かれる。だから、必死で謝るしかなかった。

「だから、いつまで手繋いでるんじゃー!!」

「あっ!」

オレは慌てて手を離す。いつまで繋いでたんだろう。隣では、茜が顔を真っ赤にして下を向いていた。

「早く教室に行け! 恋愛は、先生の目につかないところでやれよー!」

「え!? あっ、はい! ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

オレ達はそういうとその場を後にした。後ろには、腕を組んで凛々しく立っている森田がまだいた。

「ビックリしたー! まさか、あの森田があっさり許してくれるなんて!」

「そうだねー!」

茜は笑いながらオレのいうことに答える。その笑顔もたまらなく可愛い。天使みたいだ。

そう思いながら話していると、すぐに教室に来てしまった。教室では、担任の眞鍋がホームルームをしていた。先生しか話していない、気まずい雰囲気の中ドアを開いた。

「ガラッ!」

その瞬間クラスの視線が一気にオレ達に向いた。

視線が浴びせられたまま、身を縮めて中に入った。

「あれ! なんてでると木下一緒にいるの!？」

鳥谷がそう言った瞬間、クラスは騒がしくなった。

「ヒューヒュー!! お前ら付き合ってるのかよー!?! いいカップルじゃん!？」 そんなような野次が沢山飛んでくる。

「ちよつとみんな! 静かにしなさい!」

眞鍋がキレて言うと、オレも続いた。

「そうだよ! たまたま会ったから一緒に来たんだよ!」

なんか: 自分でも変な言い分けとわかった。なので、野次がおさまるはずがなかった。

「本当は朝までやってたんじゃないのー!?!」

誰かが発した言葉でオレはカチンときた。

「んなわけねーだろ!!! 中3で早すぎなんだよ!!!」 「いい加減にしなさい!!!」

かなり先生がキレていたので、騒ぎはそこでおさまった。茜は、泣きそうな顔をしている。慰めると、また何か言われそうなので、諦めた。

5、悲しい視線

その日、午前中の授業は何事もなく終わった。

そして、昼休み：オレの席にニヤニヤしながら星と、後：わっちが下を向きながらやって来た。

「てゝる。何で木下と一緒にだったんだ（笑）」

オレは、星の言葉は無視してわっちを見て言った。

「昨日はごめん！！オレが言いすぎた！！」

すると、わっちは以外にも笑ってこう言った。

「別に気にしてないよ！あと：オレ今日美子と学校に来たんだ！」

え！？

頭の中が真っ白になった。わっちは、美子の告白を受け入れたってことか！？

そ、そんな！どうして！？オレの不安を断ち切るように、わっちが続けた…。

「でも、美子はわけがあってオレと付き合ってたなんて言ったんだけどなあ。」

「は！？」

普通付き合うのにわけなんているのか。頭が混乱しておかしくなるのを抑えながら必死に言った。

「わけってなんだ！？付き合うのにわけなんているのか！？」

その途端、クラスの視線が驚いたようにこっちに向いた。昼休みなので、クラスいる人はまばらだったがその視線について、下を向いてしまった。大きな声を出しすぎた。

すると、またわっちが笑って答えた。

「それは、教えられないよ（笑）自分で発見しないと。」

どういうことだ。自分で見つけるってなんだろう。オレが直接美子

に聞けって事か？でも、今この気まずい雰囲気の中美子に話しかけるのはちよつと抵抗がある。

じゃあ、放課後に呼び出そう。と思って美子を見ると…悲しそうな目がこつちを見ていることに気付いた。

「どうした美子？何かあったのか！？」

言葉をかけてやりたかったが、席が美子は窓際の一番前、オレは廊下側の一番後ろと離れているので、声もかけられなかった。

「え！？てるってまさか美子も好きなの？へえ。木下と二股なんだ。」

「ち、違うよ！っていうか何でオレが美子をすきだって思うんだよ！？」

「顔見ればわかる（笑）真っ赤だよ。」

「う、うるせー！」

自分でも分からないけど、知らぬ間に顔が真っ赤になっていたようだ。やっぱりまだ美子を諦めきれないのか。

未だに美子の悲しい視線がこちらに向けられていることに、オレは気付かなかった…。

その目に深い意味があったとは、かなり後にわかったことであつた…。

6、二股か！

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。クラスメート達がぞくぞくと教室に戻ってくる。

次の授業は英語だ。その授業中にまた茜と親しくなるチャンスが起った。

英語の庄司が教室に入って来た時茜はとっさに言った。

「先生！教科書忘れてしまいました！」

茜は困ったように先生を見つめていた。

「しょうがないな。おい吉岡見せてやれ！」

吉岡は、オレの名字だ。オレは、ラッキーなことに茜の隣だったので教科書を見せられた。

「ごめんね、てる君。」

机をくつつけようとした時、茜が恥ずかしそうにいった。

「いいよ！オレもラッキーだし。」

「えっ!？」

「なんでもないです!!」また、本音がバレるところで危なかった。この驚いた顔もたまらなく可愛い。いっそのこと抱きしめて離さないでいたいと思った。

授業中、オレ達はあまり授業に集中せず、茜と好きなテレビ番組、最近ハマっていることなど、くだらないことについて沢山話した。色んなこと話している時、茜がオレに小さなノートの紙切れを渡してきた。

『今日の夜メールして！』

a k a n e . i | k | m | n | g : : : : : 』

オレは、その紙切れをもらった時嬉しくて感動した。最高の笑顔で茜に感謝する。

茜は、照れ隠しのためか、反対の方を向いていた。肩よりちょっと長い黒髪が、窓に降り注ぐ散々の太陽を浴びて輝いている。

その姿を見ると普通の茜とは違う、大人な雰囲気を感じられる。

オレは、メアドが書かれた紙切れを抽出のファイルに丁寧にしまうと、前を見た。

「あー!!」

思わず声を出してしまった。前には、茜とのやりとりの一部始終を見たかのように、美子が寂しげに見ていた。

美子は、オレと目を合わせた瞬間に目を反らした。

あの寂しげな目は一体なんだろう？大切なものを失ったかのような悲しい目。

それで、オレは美子の事を考え始めた。別に何も悲しさせるような事はやってない。むしろ、わっちなんかとデキかけてるから、嬉しい方なんじゃないかと思う。

「まっ！放課後聞けばいいか！」

とモヤモヤしながら思った。

キーンコーン!!

短かったような授業が終わった。後残り2時間で学校が終わる。それを期待しながらずっと待っていた…。

キーンコーン!!

最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。これでホームルームが終われば下校だ。

眞鍋がホームルームのために来た。何だか、とても急いでるようだ。

「今日は、会議があるためにホームルームはコレで終わりです！」

よっしゃー！って叫びたかった。いつもより早く学校が終わった。

生徒達がゾロゾロと教室からいなくなっていくその中に美子が友達と帰っていくが見えた。

オレは、すかさず美子の傍に駆け寄ったが…

「ごめん。私先帰るわ。」って友達に言って、走って帰ってしまった

た。

オレは、美子の後ろ姿を追いかけたが、もう見えなくなってしまった。

「吉岡君……。」

肩を叩かれて後ろを振り向くと、美子の友達の今村がたっていた。

「もう少し美子の気持ちわかってあげなよ……。」

「え……？」

「わかんないならいいよ……。じゃあね。」

今村は、冷たい感じで去っていった。オレは、ただただアイツの後ろ姿を見るしかなかった……。

しかし、今村がいったことが気になる……。オレは何も美子のこと分かってあげてないのか？

美子のあの急ぎよう……。

まるでオレを避けてるように感じたのは、オレだけだろうか……？

7、不思議なラブレター

その後、オレは教室に戻った。

数えるくらいの生徒しか教室に残っていなかった。その中の1人が言った。

「てるゝ！帰ろうぜゝ。」

星だった。後ろにはわっちもいる。わざわざオレの為に待っててくれたみたいだ。自分で言うのもなんだが、いい友達を持ったと思っている。わっちとは、もう仲直りすることができて一安心なのだが、なぜかわっちを見るたびに美子のことが頭に浮かんでしまう。

「どうした！木下のことを考えてたのか！？」

「ち、違うよ！！」

教室には、茜の姿はなかった。まあ、それはそれで今は都合がよかったのだが・・・。

廊下を3人で何の話題もなく歩いている時に、オレは意をきめて星たちに相談することにした。」

「なあゝ。オレっていけないヤツなのかなゝ。美子が好きなのに、木下までだんだん気になってきてるんだ・・・。」

オレがそういうと、わっちは意味ありげな表情を浮かべたようだった。なんでそんな不思議な表情をするんだろう？オレはその表情の意味を今では全く理解することが出来なかった・・・。

「いいんじゃないのゝ（笑）てるは、欲がありすぎるからゝ。」

「な、なにを！！」

「ははは！冗談だよ（笑）」

確かに、オレは欲が深い。欲と言っても性欲が特に深い。毎日3回は、色んな事を想像しながらイッてしまう。まだ、Hはしたことがなく初体験は好きな人と一緒にしたいと思っている。

「欲なんかねゝよ！」

星の言うことに対して、適当に返事をしていた。もし、初体験をす

るなら美子と茜のどちらがいいか妄想してしまったからだ。自分でもバカなことを考えていると思っている。ましてや、茜のことはまだ本気で好きではないのにHの対象として考えてしまった。

下駄箱まで来て、自分の古びた木の下駄箱を覗くと、靴の上に何やら封筒らしきものが乗っていた。

まあーまさしく現代でいうと、ラブレターというものののだが今回はちよつと違うようだった。ただ普通の紙切れに女子らしい独特の字でこう書いてあった。

『今日の放課後、私の一番大好きな場所で待っています。

茜より』

あ、茜ちゃん！？とても驚いた。まさか、あの告白の返事を待っているのか。そう思った。

しかし、茜の一番大好きな場所ってなんだろう。そんなこと一言も言ってなかったからなあ。

「なんだそれ！？ラブレター？しかも、木下からじゃん！！OKしちゃえよ！」

「うるせえ！黙れ！」

星の言うことにキレて答えた。茜の一番大好きな場所を考えていたからだ。

オレは、行こうかどうか悩んでいた。辺りは、夕暮れのせいかな、暗くなり始めている。

「ごめん！オレ行ってくる！！」

意を決して行こうと決めた。

「お！行ってこい！」

星がオレの背中を後押しした。

また廊下に戻ると、下校する生徒達でいっぱいだった。そんなことはおかまいなしに、人の並をかわしてオレは茜を探しに行った。

8、満月に奏でるピアノ

オレ達を通ってる学校は、井出中学校といい、公立中学校にしては5階建てとかなり広い。まだ、建設されてから5年なのでとても綺麗で、一つの階に10程度の部屋があり茜を探すのはかなり苦労した。

最初は、図書室。

蔵書が15万冊もあるこの図書室は、休み時間になると調べ物をする生徒で一杯になる。

しかし、放課後になると殆どいなくもちろん、茜もいなかった。

そして、一階はどの部屋を探してもいなかった。
続いて2階。

この階は、家庭科や実験室など移動教室でよく使われる。

さすがに、実験室にはいないだろうといったが、やはりいなかった。
…。

どれくらいの間時間が経っただろうか。まだ、夏だというのに辺りは真っ暗になってきている。廊下では、もう警備員が鍵の開閉を点検しているようだ。

こんな時間まで茜は待っているのだろうか？もう帰ってしまったのではないかと同時に、早く茜を探さねばという焦りの気持ちがあった。

「落ち着け！落ち着けオレ！」

心の中でそう繰り返し、気持ちを落ち着かせていると、ある茜との対話が頭に浮かんできた。

それは、今日の英語の授業での話であった。茜が教科書を忘れたので、隣であるオレが机をつけて見せてあげたのだが…オレは茜の色んなことを知れたかったので、もちかけた話である…

『木下ってさ。好きなアーティストいる？』

『うん！いきものがかりが大好き！将来は、あの人達みたいになりたいって思ったもん！！でも…あたし、ピアノの方が好きで…まあ全般に楽器は全部好きなんだけど…………』

話は、そこまでしか覚えていなかった。

でも、自分にはそれで十分だった。

「音楽室だ！！」

確信したように、全力で音楽室に向かって走った。

音楽室は、5階にある。また3階分階段を上ると思うと、正直きつかったが、茜のためだと思うと疲れなんか気にせずに走ることができた。

オレは、音楽室のドアを思いっきり開けた。それと同時にバタツというもの凄い音がした。

茜って大声で呼ぼうとしたが、まだ付き合ってもいないのにそう呼ぶのは抵抗があったので、木下って呼ぼうとした時、音楽室全体にピアノの美しい音色が響き渡った。

「♪♪♪♪♪……」何処かで聞いた覚えがある。確か、ショパンの曲だったような気がする。月9の

「太陽と海の教室」でやってたやつ。

オレはその曲にうっとりし、つい聞きいってしまった。

真っ暗な部屋の中窓際の方で、月明かりに照らされながらピアノを弾いている茜が、とても美しかった。

声をかけたかったが、茜の真剣な姿に黙って見とれることしかできなかった。

数分後、ピアノの音色が静かに消えていった。

音楽室の中は、徐々に静寂を取り戻していった。

茜がオレの方にゆっくり向かってくる。その姿は、まるでピアノストのように堂々としていた。

「あたしの演奏どうだっ：！？」

オレは、言い終える前に茜を強く抱きしめていた…。自分でも分か

らないが、勝手に身体がそうしていた。

「て、てる君……？」

茜はちょっとビックリしたように言ったが、この静寂を壊さないような静かな声で言った。

次にオレは、我慢出来なくなって自分の気持ちを素直に言った。

「好きだよ……。」

とても胸が熱くなった。そう……初めて茜の手を握った時みたい……。

「木下……っ。」

「茜でいいよ……っ。」

「茜……好きだよ。」

何回もその言葉を言う自分が無性に恥ずかしくなった。

茜は、オレの顔に頬を寄せて言った。

「で……でも、坂口さんがいるじゃん……」

最初に告白したのは、茜の方だったのに、そんなに弱気になっている茜を見て言葉に出しているのも気付かずにこう言った。

「可愛いよ……。オレの天使みたい……。」

「恥ずかしいよ……。そんなこと言って……。」

オレは、更に可愛くなった茜を放っておけず、抱いていた身体を離れた。

そして、頬を手で挟み、茜の唇にオレの唇を重ねあわせた。

2人とも顔が真っ赤だったが、静かに目を閉じて唇を離そうとしなかった。

「これがオレのファーストキスだから……。」

「あたしも……。」

どうやら2人共これが初キスだったらしい。

月明かりに照らされた茜は時に色っぽく見えた。

オレは、してはいけないと分かっているながらも抑えきれない衝動に負け、茜をヒンヤリと冷たい床に押し倒してしまった。

「ちょ、ちょっとてる君!？」

オレは、茜がビックリしてちょっと抵抗しているのに気付き、止めた。

異様な雰囲気音楽室中に漂う。オレは、そんな雰囲気を消そうと茜に必死で謝った。

「ごっごめん！！押し倒したりして！もっと茜を大事にするはずだったのに！」その時、突然オレの制服のポケットから携帯がなるのが分かった。

いきものがかりの

「ブルーバード」だ。よく電話をする人は、この着信音にしている。「あつあたしもその歌好き！」

「あっそうか！茜もいきものがかり好きだもんね！」ちょっと雰囲気が明るくなったような気がした。

そして、ポケットから携帯を取り出して電話にでた。

「もしもし？」

電話は、お母さんからだった。どうせ、早く帰って来いってことだと思ったが、それは当たりだった。

「何してんの！もう7時よ！いつまで学校にいるの！？」

もうそんな時間になってしまったか…。どうりで辺りが真っ暗なわけだ。

「分かったよ。すぐ帰る！」

そう言ってすぐ電話を切った。

オレは、座っている茜に手をさしのべて帰ろうと言った。

茜はうなずいて、一緒に音楽室を出た。

廊下は誰もいなく真っ暗で、物音一つもしない。まるで、学校の怪談みたいな景色だ。

「ねえ〜てる君怖いよ〜。」

「大丈夫！オレがついてる！！」

っては言ってみたものの、本当は内心とても怖い。昼と夜でこんなに違うんだと思うほどだ。

2人とも手をしっかり繋いで、恐る恐る下駄箱を目指した。しかし、

事件はその途中で起こった・・・。

2階まで来ると、かすかに光が見えた・・・。職員室だ。職員室では、まだ先生達が残っているらしい。オレ達は、階段ごしにそちらの方を覗いた。誰も職員室から出てこないのを確認してから、静かに下り始めた。

その時だった・・・。後ろから声がしたのは・・・。

「お前ら！！何してんだ！！」

「わー！！！！」「きゃあー！！！！」

そのあまりにも意外な出来事にオレ達は、うっかり叫び声をあげてしまった。本当にお化けが出てしまったかと思ったからだ。

2人は、ゆっくりと後ろを見た・・・。暗くてよく見えないが、確かに人影があるのはわかる。

あっちにもこちらが見えないらしく、じっくりオレ達を見ている。

しかし、その人が木刀らしき物を手に持っていることに気づいた。

それならば、話は早い。

「生徒指導の森田だよ・・・。」

オレは、恐怖で硬直している茜を優しい口調で耳元に囁いた。すると、茜からはこんな返事が返ってきた。

「森田先生なら、大丈夫じゃない・・・？だって、さっきも見逃してくれたから・・・。」

確かにそうかもしれない。なんでまだ森田が出てくるんだって鬱陶しく思っていたが、茜の言うことは正しかったのかもしれない。

なので、オレ達は正体を先生に晒すことにした。

「先生・・・。僕です・・・！吉岡です・・・。あと木下です・・・。」

言ってしまった。でも先生は急に表情を変え、暗くてもわかるような笑顔でこう言った。

「お！またお前たちかつ！奇遇だなあ。何！愛の告白でもしてたのか！？」

生徒指導の教師がこういう人はどうかと思ったが、オレはためらいなく答えた。

「はい、そうです！オレは木下さんが好きです！！」

先生は、そうかそうかと頷いて、オレ達を満面の笑みで笑った。それもつかの間、騒ぎを聞きつけた先生が職員室から出てきた。オレ達は、パニックになってしまった。しかし、森田は落ち着いてこういった。

「早く行け！ここはオレがなんとかしとく！いつまでもお前たちが長続きするといいな（笑）！」

「あ、ありがとうございます！！！恩にきます！！！」

2人はそう言っ、その場を後にした。走って下駄箱に向う途中、オレはこんなことを思っ。

「先生は、本当はもの凄くいい先生なんじゃないか！もしかしたら、中学時代先生も同じような経験をしたのかも。」

それは、茜も同じ考えだったらしい。オレ達は、走りながら笑った。上からは、先生が先生達に詰問されている。言い訳をわざわざ考えてくれていたらしい。オレ達は、それだけで森田が優しい人間だとわかった。

下駄箱ですぐに靴を履き替えると、やっと外に出た。

辺りはもう真っ暗で、1人で帰るにはちょっと怖かった。さすがにこれはお母さんに怒られると覚悟した。

「家まで送るよ！！！」

茜を1人で帰らせるわけにはいかない。もし茜の身に何かあったら・考えるだけでも胸が痛くなる。

「え！？大丈夫だよ！！！1人で帰れるよ！！！」

「ダメ！って言いか送らせて下さい！！！！！」

「うん・・・お願いします・・・。」

つい敬語になってしまった。それほど茜を送り届けたかったからだ。茜もオレの熱意に負けたのか、やっとOKしてくれた。

手を繋ぎながら歩く暗いいつもの道。そこには、いままで歩いてきた時とは違う温かいものを感じる。オレは、いつまでもこの時間を大切にしようと思った。そして、いつまでもこんな時間が続いて欲

しい、そう思った。

茜が道を案内する。しかし、時は意地悪なのか、時間を早送りしたように時は早く流れ気づいた時にはもう茜の家の目の前だった。

「ありがとう……。」

茜の言葉が余計に寂しくさせる。おれは、お別れの言葉と今日の行き過ぎた行為を謝った。

「どういたしまして……。今日は押し倒してごめん!!」

「別にいいよ……。もう終わったことだし。でも、ちょっとビックリした!」

恥ずかしがっているのか、茜は、俯いている。

「よかった!許してくれて。」

暫く沈黙の時間が流れた。オレは、恥ずかしながらこう言った。

「やだよ。茜ともっといたいよ!!!!」

すると、茜は笑ってこう言った。

「また明日会えるじゃん!!」

そういえばそうだ。オレは茜が言った当たり前のことに自分が言ったことが恥ずかしくなった。オレは黙って俯いていた。

「でも……てる君の言葉嬉しかった!!」

茜が久しぶりに喜んでくれた。オレは、茜の笑顔を見ると忽ち笑顔になった。

「ほ、本当に!?嬉しいよ!じゃあまた明日ね!!」

オレが帰ろうとしたと時、茜がなにか言ったので振り向いた。

「夜、メールしてね!!」

「もちろん!!」

そうか、茜とは家にいても会えるんじゃないか!嬉しさがこみ上げてきた。オレは、最高の笑顔で茜に手を振り、暗い夜道を1人で帰って行った。

1人で帰っている途中オレは、中3でありながらずっとこう思っていた。

「今日は、とても短い1日だった。それは、茜という存在が傍にいたからだ。オレは、これから茜と毎日を共に過ごすこととなるだろう・・・。時には、ケンカなどもすると思う。でもオレは、それもすべて受け入れて茜と過ごす時間を大切にして生きていきたい。この一生に一度しかない生涯を、茜という存在と共にどこまでも歩んでいきたい・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8004e/>

Last Message

2010年11月9日14時25分発行